

▶大勢の人々で賑わった「復興なみえ町十日市祭」



伝統絶やさぬ…二本松で十日市祭 開催

地元で各種のイベントを開催するなど活発な活動を行っていた新町商店会だが、震災後に故郷を再興する活動を行うに当たり「任意団体の限界を感じ」行政との連携はもとより、各種の助成制度が利用できるNPOを設立するに至った。商店主らによるこのような活動は県内では他に例がない。

「十日市祭」は秋の収穫後、新年を迎えるための品々を求めめるために立った市が起源という。「伝統の祭を絶や

● 特定非営利活動法人まちづくりNPO新町なみえ

浪江町および周辺地域の市民の絆を取り戻し故郷の復興を目指す。地元の新町商店会のメンバーら三十人が十月「特定非営利活動法人まちづくりNPO新町なみえ（原田雄一理事長）」を立ち上げ（認可申請中）、二本松市の浪江町役場二松第二事務所を拠点として、イベントの実施、地元の線量測定など様々な活動を精力的に展開している。十一月五日（土）、六日（日）の両日は約百三十年続く伝統の「十日市祭」を二本松駅前「復興なみえ町十日市祭」として開催、県内外の避難先から訪れた浪江町民を始め多くの人出で賑わった。

商店主らNPO設立

故郷浪江の復興 自分たちの手で



十日市祭会場に用意された寄せ書きに書き込む子供たち



メンバーによる地元の線量測定

したくない」との思いから、店が二本松駅前に集結、ご開催した「復興なみえ町十日市祭」には本家の約四分の一ながら七十軒ほどの露店、有名な岡山県の津山ホルモンのほか「まちづくりNPO新町なみえ」は帰郷に備え「行政や報道に任せきり」にせず、独自に地元の放射線量を測定しデータ化する活動を行っている（メンバーのほとんどが除染業務講習会に参加済み）。また、孤立しがちな仮設住宅の独居老人への定期訪問を予定するなど、様々な活動に力を惜しまない。

原田理事長（62）は「私達は非日常の中にいるけれど心の中の浪江までは失いたくない」副理事長の神長倉豊隆さん（60）も「自分たちの町だから自分たちで取り戻したい」と言う。メンバーたちは「故郷再興」への希望を決して捨てない。



「まちづくりNPO新町なみえ」のメンバー（設立総会にて）

絆新聞

ふくしま

第2号

避難している人 みんなの情報紙

がんばろう福島！
「絆」づくり応援事業
福島県委託事業

＜絆新聞編集室＞
〒963-8835 福島県郡山市小原田 2-19-19
TEL024(944)0083

メールアドレス kizuna-fp@utsukushima-npo.jp

＜受託・発行＞
特定非営利活動法人うつくしまNPOネットワーク
発行日：毎月1日

＜絆新聞（Web版）＞
<http://www.utsukushima-npo.jp/kizunashinbunweb/>

11月の紙面

- 2面 ●連載「再始動の軌跡」① 飯館の市澤秀耕さん
- 3面 ●南相馬の小林繁樹さん 浪江の近藤学さん 葛尾の石井一夫さん
- 4面 ●ふるさと絆情報ステーション開設 ●絆づくりキャンドルナイト開催

情報お寄せください

絆新聞編集室では、皆様からの情報をお待ちしています。避難生活であきらめていたことが実現した、仮設住宅の一人暮らしのお年寄りを定期的に訪問している、避難先や別の地域で家業を再スタートさせた、イベント開催の予定、困りごとなど各種相談、どんな内容でも結構です。電話、郵便、メールでお寄せください。

本紙連絡先 ☎024(944)0083

✉（メール）
kizuna-fp@utsukushima-npo.jp



本紙の配布場所募集

絆新聞編集室では、避難生活を送る方みなさんに本紙をお届けしたいと考えております。仮設住宅以外で生活されている方々の目につきやすい施設、企業、店舗等で本紙を置いていただける場所を募集しています。本紙は無料です。

戸の田植踊りなど盛り沢山のイベントも展開された。県外に避難している町民を二次避難の際にお世話になった付近の温泉地へ招き祭を楽しんでもらう企画も定員を大きく上回った。

会場では久しぶりの再会を懐かしむ浪江町民の姿がそこで見られた。田植踊りのイベントのため訪れた東京都立川市に避難している渡部文江さん（56）は「今年のは十日市祭を見られるとは思っていなかったのが驚きでした」と感慨深げだった。